

# 高大接続システム改革に向けて 中間作業 その1

2016年10月22日  
Max Study Group

## A 改革の要点

### 1 全体について

#### (1) 改革の趣旨

- ・グローバル化、社会の変化に対応する教育を展開する。
- ・多様な能力、適性、背景を認め、一人一人の可能性を伸ばす教育を展開する。

#### (2) 高大接続システム改革とは

高大接続システム改革とは「高等学校教育」「大学教育」「大学入学者選抜改革」の3つをまとめて改革しようとする三位一体の改革である。

#### (3) 学力の3要素を基盤に、3つの改革を一体化して行う。

#### (3) 新テストとその位置づけ

改革は、高校教育改革からアプローチするものと大学教育改革からアプローチするものと2つのベクトルがある。「高等学校基礎学力テスト」、「大学入学希望者学力評価テスト」と2つが新テストとして設定されているが、前者は高等学校教育の範疇であり、後者は大学教育改革の範疇である。

### 2 高等教育改革について

<論点1： 教育課程の見直し>

- (1) 教育内容を系統的整理 + 学習・指導方法、学習評価の充実
- (2) 共通性の確保+多様化への対応
- (3) 教科、科目の新設を検討する
  - ・歴総合、地理総合、公共、数理探求

<論点2： 学習・指導方法の改善>

- (1) 知識、暗記、再生に偏重された授業から、「学力の3要素」を基盤とする授業に移行する。
  - ① 基礎的な知識および技能
  - ② 知識、技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力

③ 主体性をもって多様な人々と協働する態度（主体性、多様性、協働性）

(2) Active Learning の視点から学習、指導方法の抜本的充実を図る。

(3) 「何を教えるか」＋「どのように学ぶか」「何が身に付いたか」

<論点3： 教員の指導力向上>

(1) アクティブ・ラーニングの視点から授業改善を図る

(2) 問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程を実現

(3) 対話的な学びの過程の実現

(4) 主体的な学びの過程の実現

(5) 教員に求められる能力の明確化

<論点4： 多面的評価の充実>

(1) 生徒の日々の活動を通じた幅広い資質能力を多面的に評価する。

(2) 観点別の評価

(3) 指導要録、調査書の見直し（3(8)を参照）

→ 多面的、総合的評価

(4) 「高等学校基礎学力テスト（通称：基礎テスト）」を導入する（詳細は4にて）

・ 基礎学力の習得、学習意欲の喚起

### 3 大学教育改革について

(1) 学長のリーダーシップによる教育とガバナンスの改革

(2) 3つのポリシーの一体的な策定

① 卒業認定・学位授与の方針（ディプロマポリシー）

② 教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー）

③ 入学者受入れの方針（アドミッションポリシー）

(3) 学力の3要素を育成する教育への転換

(4) 大学認証評価制度を改定する（平成30年度）

(5) スーパーグローバル大学の取り組み推進

### 3 大学入試改革について

(1) 基本的な考え方

・ 知識の暗記・再生、解法パターン → 学力の3要素の評価

・ アドミッションポリシーに照らし合わせた多面的、総合的評価

(2) 多様な背景を持つ受検者の選抜

- ・ 専門高校生、帰国生、留学生、特別支援学生、など
- (3) センタ試験の廃止
- (4) アドミッションポリシーの明確化
- (5) 個別入試の多様化、多面的な評価方法の確立
  - ・ エッセイなどの応用、検定試験の評価など
  - ・ 調査書などの有効活用化
- (6) AO 入試、推薦入試の改善
  - ・ 小論文、プレゼンテーションなどの奨励
  - ・ 学力の 3 要素を評価する書類の提出
- (7) 一般入試の改革
  - ・ 調査書、活動履歴、学習計画書などの積極的利用
  - ・ 出題科目、数の見直し
  - ・ 自由度の高い記述式の問題など、作問の改善
  - ・ 小論文の導入
- (8) 調査書の見直し
  - ・ 観点別の評価による多面的、総合的評価
  - ・ 「指導上参考となる諸事項」等の欄を拡充による多様で具体的な内容の記載
  - ・ 特定の分野において優れた成学習成果を記載
  - ・ 評定平均値のあり方の議論
- (9) 推薦書の見直し
  - ・ 学力の 3 要素に関する評価を必ず求める
- (10) 受験生本人が提出する書類の見直し
  - ・ 活動報告書、入学希望理由書、学習計画書の充実、積極的活用
- (11) 大学入学希望者学力評価テストの導入（詳細は 5 にて）
- (12) 英語入試改革：
  - ・ 外部試験の導入
  - ・ 4 技能の評価
  - ・ マーク式テストと多技能評価試験は別日程を検討
  - ・ スピーキングではタブレットやレコーダーの利用を検討
  - ・ 費用負担、受験機会、セキュリティーなど課題もある
- (13) CBT の導入
  - ・ セキュリティー、テスト環境、コストなどの課題もある
- (14) 年複数回実施
  - ・ 挑戦の機会を与える
  - ・ IRT に基づく難易度などの整理
  - ・ 複数回試験の結果を等化することも検討

#### 4 高等学校基礎学力テスト（仮称）について

- (1) 様々な学校の生徒が受けることを前提としているので、国語表現Ⅰ、数学Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅰといった必修科目をもとに実施する。
- (2) 平成31～34年は試行期間とし、大学入学者選抜、就職には用いない。
- (3) CBT、アイテムバンクの利用を検討
  - ・ 問題収集・作成には、民間や学校に既存問題を提供してもらうように協力依頼
- (4) 知識、技能を中心に、思考力、判断力、表現力の問題も出題
- (5) マークシート式 + 多様な回答方式
- (6) 幅広い学力層が受けられるように、義務教育段階の学習内容を含めて出題
- (7) 英語は4技能を測ることができるようにする。民間試験の活用も推奨。
- (8) 結果の提示は学校や個人の順位は提示しない。
- (9) 実施について
  - ・ テスト時間： 1科目 50～60分
  - ・ 受験料は数千円程度の低価

#### 5 大学入学希望者学力評価テストの導入

- (1) 平成32年度から実施
  - ・ 学力指導要領に合わせて平成32～35年、36年以降と2段階に分けてテストの設定を行う
- (2) 知識・技能を評価する問題 + 思考力・判断力・表現力を評価する問題  
→ 得点比重は大学側で設定
- (3) 難易度は広範囲に設定
  - ・ 幅広い学力層が受験できる + 難関大学でも評価として活用できる
  - ・ コアの部分と多様性を測る部分のバランスを取る
- (4) マークシート式問題の改善
  - ・ 問題に取り組むプロセスにも判断を要する
  - ・ 複数のテキストや資料から情報を組み合わせ思考、判断する
  - ・ 分野の異なる文章の比較検討
  - ・ 学習内容と日常生活を結び付ける
  - ・ 他教科や社会との関わりを意識する
  - ・ 正解が1つに限られない問題
  - ・ 選択肢から選ぶのではなく、数値や記号等をマークさせる
- (5) 記述式問題の導入
  - ・ 思考力、判断力、表現力を評価
  - ・ 作問、採点、実施方法の検討

- ・条件付き記述式（解答の自由度が高いものではない）
- ・国語、数学で導入
- ・平成 32～35 年は短形式、36 年以降はより長いものにする
- ・段階別表示で結果を提示する
- ・採点はコンピューターによるクラスタリング（分類分け）も検討
- ・マークシート式と記述式を別試験日にすることもある

(6) 教科、科目

- ・科目数を絞る
- ・教科型、合教科型、総合型の 3 種類
- ・歴史総合 + 世界史 or 日本史の選択
- ・数理探求

(7) 結果の提示、利用

素点、総合点だけでなく、多様な情報（領域ごと、など）とともに結果を提示する

## 6 スケジュールの確認

(1) 新指導要領の実施

平成	西暦	教育課程・学習指導要領	高等学校 基礎学力テスト	大学入学希望者 学力評価テスト
28	2016	中教審において審議 → 答申（年度末）	実施方針の策定に向けた 検討	
29	2017	告示	実施方針の策定、公表（年 度初頭） プレテストの実施	実施方針の策定・公表
30	2018	周知、徹底	実施大綱の検討 → 策定、公表	プレテスト実施
31	2019		実施（試行期間）	実施大綱の策定・公表
32	2020			実施
33	2021			新指導要領に対応した実 施大綱の予告
34	2022	新学習指導要領の実施 （年次進行）		
35	2023		本実施	策定、公表
36	2024			実施
37	2025			

## B ディスカッション

### 1 全体について接続

- (1) 高校教育の改革もわかるが、その前段階の教育、小学・中学の授業がどうあるべきで、高校の授業にどう接続するのか、ということも重要。首都圏には、中高一貫校が多くあり、中高の接続は比較的例も多いが、小学校との接続は中1ギャップも含めて課題であろう。貧困問題も考え、また全体の底上げも考えると小中高大の
- (2) 高大接続と言っているが、場合によっては高校卒業後社会に出る生徒については、この改革はどのように機能するのだろうか。
- (3) アクティブラーニング、主体性、協働性、など定義の曖昧な言葉が並んでいる。もう少し具体性が示される必要があるのではないか。
- (4) 大学入試改革と言うよりは、そもそも高校も大学も「学びのあり方を変えよう」という試みであろう。ただし、具体的にどう進めるのかということが詰められておらず、最終報告に至るまで、現場からの反対の声も反映させたりする過程で、なし崩し感が出ている部分も否めない。
- (5) そもそも日本の教育政策がどういう方向性に進んでいくのか、そして学力観をどう定めるのか、ということを考えていかななくてはいけない。
- (6) 世界における日本の沈没ぶり、少子高齢化などを見ていると、やるしかない。

### 2 教員の意識

- (1) 教員の理解・勉強が不十分であり、この改革を抽象的な形でしか語れない（その割には、十分に理解せずに「入試改革」「学力の3要素」など言葉だけは使う教員がいるが）。まずはどのように教員に対して改革の中身と意義を周知徹底し、意識を変えさせていくのが重要だろう。
- (2) 改革に反対的であったり、無関心である教員が相当数いる。特に、年配の教員で、新しい教育に自信がなかったり、これまでの教育方法に固執したり、さらには定年を前にして変わる気もないという教員をどのように扱っていくのが難しい。
- (3) 高大接続に関しては、職員会議などで言及はされるが、資料は学内におかれている程度。興味のない教員は目にもすることもなし、興味がある教員ですらさらっと目を通すぐらいで終わっている現状もある。
- (4) 英語4技能試験のガイダンスを行ったが、生徒の食いつきが良かった。一方で、教員はまだ十分に情報も持っておらず、対応できていない。少なくとも、英語外部入試について言えば、生徒の意識の方が教員の意識よりも高いのではないか。

### 3 生徒の現状と対策

- (1) 中学もしくは高校の入学時点ですでに「できない生徒」という層がいて、その生徒たちは、アクティブラーニング以前の問題もある。それらにどのように対応するのか。また、対応できない場合のセーフティーネットがあるのか。
- (2) 受け身の生徒が多い。自分で将来を見据えて選択することができない生徒が多い。
- (3) 反転授業やプロジェクト型の授業を実施した場合、家庭での学習が増えることもあるが、一方で、家庭で学習しない生徒はより落ちこぼれていくことも懸念される。
- (4) (現在高3を持っている先生の意見) 今はまだ、3年前に高3を持った時と、大きく状況は変わっているとは感じていない。
- (5) 高大接続と言っているが、場合によっては高校卒業後社会に出る生徒については、この改革はどのように機能するのか。

### 4 授業のあり方、指導法、評価方法

- (1) 教える内容・量が大きく変わるわけではないのであれば、果たしてどこまでアクティブラーニングが可能なのだろうか。
- (2) 反転授業、ICTの利用が必須になってくる。
- (3) 評価方法をどのように変えていくのか
- (4) 定期テストも変わるだろう。その場合、やはり同じような記述式を入れていく必要性もあるだろう。
- (5) 思考力を教えるとなると、思考の型を教えたり、そのトレーニングも必要になる。
- (6) これらのことを全部導入するとなると、今以上に盛りだくさんの授業になるだろう。
- (7) 読み・書き・そろばんではないが、まずは基礎力がないと、思考力も判断も何もない。教育が変わるからこそ、そのような基礎力がますます重要視されてくる。そのバランスを見
- (8) 多面的な評価制度は作れると思うし、学校の中で運営できると思う。しかし、同じ活躍度だとしても、各高校の偏差値、レベルによって、その活躍度に傾斜ができてしまわないか( )先入観が入ってしまわないか) 懸念する。
- (9) 最近の文科省の資料には、アクティブラーニングという言葉がバンバンでてきて、気持ち悪い部分がある。
- (10) これまで一律に同じ尺度で評価していたことが「平等、公正な評価」だったが、これからは個々の多様性に合わせて評価することが「平等、公正な評価」とされている。
- (11) 学びのあり方を変え、求められる能力を再定義することは重要であるが、合わせて、社会的に自立した人間を育て、社会・未来とのつながりを構築するキャリア教育も同時に機能しなくてはならず、その重要性がより増してくる。
- (12) 思考力、表現力は分かるが、判断力はどのように図るのか。

## 5 学校の構造改革

- (1) 新しいテストが始まり、新しい科目が新設され、学校の業務がさらに忙しくなる。
- (2) それらに関わる教員の負担を考慮した授業数や分掌の配置をする学校は少ないのではないかと。仕事負担、メンタル面の配慮なども含め、労働環境の整備ということも必要ではないか。
- (3) 進路対応が複雑化され、進路部の仕事比重が増えるため、その強化とスタッフの育成が必要になる。
- (4) 現在の分掌のあり方だと、高等学校基礎学力テストと大学入学希望者学力評価テストの2つを同じ部署が運営するとは限らない。例えば前者は教務、後者は進路という分担になることが予想されるが、それらをどう整理・精査し、1つのシステムとして運営していくのが課題である。
- (5) 学内で進路に対して連携が取れておらず、教科は教科、担任は担任という形になっている。入試が変わっていくかどうかの前に、進路に対して教科、担任、学年が同じ意識で連携し、推し進めていくことが難しい。
- (6) 今の文理コース分けは「受験のためのコース分け」であり、文系的思考を活かすため、理系的思考を活かすためというわけではない。ただし、思考力を養うのであれば、実質、両側面必要であり、文理分けのあり方も考え直す必要があるだろう。
- (7) 大学入学者希望者学力評価テストで、科目数を絞るのであれば、必修修以外のカリキュラム編成も変わってくる。現在のなんでも取らなくてはいけないというようなキツキツのカリキュラムでは、アクティブラーニングを深めるには限界がある。ただし、進学校が科目数を減らすカリキュラムにするのだろうか。

## 6 高等学校基礎学力テスト

- (1) 義務ではないとした場合に、学校として実施するメリットは何か。順位も出さない、入試にも使わない、となった場合に、特に私立校の場合、このテストを実施しないという学校も出てくるのではないかと。
- (2) (高卒の就職先が「学力テスト」の結果を見て、就職を決めることは現実的には考えられない。その中で、就職を目指す生徒たちにとって、テストを受けるモチベーションはどこにあるのか。)
- (3) 行事や進度の問題もあって、いつ実施するのかということが難しい。少なくとも学校が歩調を合わせて時期や取り組み方をそろえるのは無理だろう。その際に、このテストの持つ意味が大きく変わってしまう。
- (4) 高校教育改革と入試改革と、それぞれのアプローチで求めるテストが違うのかもしれないが、結局はテストが増えてしまったという現実がある。受験勉強からの脱却的な意味合いもあったはずだが、結局はテストにより縛られていくことになる。



- (5) 学力だけの評価から脱却して、多面的な評価をするという方向性であるが、このテストがあることで、学力の評価の比重が重くなることもありうる。
- (6) 学校の順位は問わないと言っても、広報戦略上、平均点などを公表する学校は出てくるだろうし、受験生、保護者も当然気にするところであり、学校序列を気にする日本社会では、偏差値に加えた新しい序列指数として機能することも考えうる。

## 7 大学入学希望者学力評価テスト

- (1) 結局、テストを変えても、勉強ができる生徒が大学を合格していくのではないか。思考力を中心にした問題で偏差値の序列は変わるのか。ある意味、上位校は知識だけあれば、応用することもできる。ある意味中堅以下の学校が知識、偏差値でかなわないため、声高らかに「思考力」を訴えていかないといけない状況がある。
- (2) 年に複数回行うことを提案されていたが、理念的には「1回のテストだけではなく、複数回チャンスを与える」ということであるが、高校の反対意見として、「受験の早期化につながる」という現実論がある。
- (3) 入試改革により、教育が変容することを期待されているが、結局は「そのテストで点を取るための受験指導」が重視されることになり、受験偏重であることには変わりがなく、その見方が変わるだけの話になってしまうかもしれない。そうなったら本末転倒で、教育改革の意義が薄れてしまう。
- (4) 学校が改革の方向に動いても、塾、予備校などが「対策」に特化してしまうと、生徒の大学入試のマインドは変わらないかもしれない。
- (5) 大学進学率がここまで高く、しかも入試が2月に集中する中で、時間的にもお金的にもノウハウ的にも「いろいろな技術を図る」ということは本当に可能なのだろうか。特に私大はスケジュール的にも受験生の数としても実行不可能なプランではないか。
- (6) 学年指導要領は8~10年ぐらいのスパンで変わっていく。文科省の人の話によると、新しい指導要領が出ると、すぐに次の指導要領の策定を考えるらしい。文科省としては、次の指導要領に合わせて、この入試改革を考えてきたはずだ。それを一気に進めていきたいという思惑もあるのだろう。
- (7) 高大接続システム改革と言いながら、教育改革の理念に誠実に対応した学校が、進学実績という点において、報わるという約束がない（場合によってはまじめにやった学校が進学実績を下げることになりかねない）。その不透明な中で、どのような方向性でやっていくのが重要だろう。
- (8) 諸活動の評価という点で何をどう評価されるのか。例えば、ボランティアや課外活動の参加という場合に、地域のゴミ拾いとNGOのプロジェクトとどちらが評価されるのか。ボランティアというそもそもの意義を考えると、そこに優劣はなく、また評価されるべき性質のものではないと感じる。
- (9) CBTを使うと、問題が持ち帰れないため、準備できないのではないか。

→ 大量の問題集が発売されるだろうから、問題ないだろう。

- (10) うまく機能すれば、学校の授業と受験勉強が一致するのではないか。
- (11) 大学の数が現状のままであり、選抜ができない大学が多くある以上、どのような入試改革をしても、大学教育の底上げはできないのではないか。上位校でも、少子化により、偏差値の雪崩が起きている。MARCH レベルでも、人数確保のために、AO 入試や推薦入試で相当学力の低い生徒、一般入試では箸にも棒にもかからないレベルの生徒が一定数入学している。
- (12) 英語外部試験が何個も乱立しているが、そのテスト間のスコア換算などに信憑性があるのか。複数選択肢があるという利点もあるが、ただ「解きやすいもの」「点数のとりやすいもの」に流れていくだろう。
- (13) 採点基準について、これだけ大規模なテストになると整えられるのだろうか。高校入試の独自問題、私立の入試などでも学内で基準が分かれ、最後に統一させるという作業が入り、打ち合わせ通りに最初からつけることは難しい。
- (14) 多面的な評価による入試を、日本の文化、世論が受け入れられるか。ペーパーテストが
- (15) 指定校推薦などでも、多面的評価と言いながら、評点の 0.1 の差の優越で決まるのが常。新テストの活用は、1 点刻みからの脱却を謳っており、バンドスコアでの提示となるが、それを判断する大学側が結局は素点の 1 点差で判断することになるのではないか。合格者を決めるにあたって、よっぽどの理由がない限り、あえて上の受験生を落として、下の受験生を取るということは難しく、結局は点数の序列で決まるだろう。アメリカ的な入試を考えているのであろうが、今回の案は手法を真似ているだけで、採点の時間、量的にも余裕もなく、点数以外の評価がほとんど入らないことも考えられる。
- (16) 一般入試において、大して調書なども見ないのに、今回の入試改革によって、表面上大学側が求めてくる書類や文量が増えると、教員は対応できない。
- (17) 教員が生徒の受ける大学のアドミッションポリシーを全て網羅するのは無理であり、書類に反映させることもできない。その中で、大学はどうやって「アドミッションポリシー」に基づいた入学者選抜を行うのであろうか。
- (18) アドミッションポリシーは明示しても、募集に苦勞する中位以下の大学は、それに基づいた入学者選抜などできるはずもなく、形骸化されてしまう。
- (19) 自由度の高い筆記問題は出さないということになっており、結局、難関大学は 2 次試験に頼るしかない。
- (20) 現状のセンター試験では、上位校の生徒は 8 割、9 割といったように高得点を取る生徒がたくさんいる。今は 1 点刻みだから上位者の中でも差が付けられるが、1 点刻みをしないとすると、その差がつきづらい。
- (21) 現在のセンター試験は思考力が必要とされる問題は出ている。例えば歴史なんかは、細かい知識がなくても、論理的に考えられれば答えられるものが多い。ただ、それが年号を覚えていれば簡単に答えられるので、受験生はそれで答えてしまう、という例がある。新テストの問題で、本当に思考力を求める問題が作れるのか。そして、そのような問題が十分に用意できるのか。

- (22) 問題作成に当たっては、アイテムバンク構築の際に、学校や民間にも協力を求め、定期テストなどを収集するというが、現行のテストから改革をするのに、現行のテストに頼っていくのか。
- (23) 正解が1つに絞れない問い、正解のない問いを出すということだが、マーク式で出す場合、それは正解の数が提示されていないというだけではないか。

## 8 大学改革について

- (1) 大学が求めたい力と社会が大学に育成を求めている力が必ずしも一致しておらず、大学はその板挟みになっているのだろう。昨今の大学改革は「社会で必要な力」という側面を意識しているが、そもそも大学は社会人養成所なのか。大学は学府であるが、学問の追及という点では、教育が成り立たない環境も出てきたように思う。
- (2) 社会人を経験してから大学に入るような機会を日本は提供できていない。社会人卒を広げても、日本の社会として、その人たちの就職先が狭いこともあり、なかなか学び直しなどもしづらい。
- (3) 大学の授業改革についても言及されているが、大学の先生がそこまでの意識を持っているのか。大規模の教室も多く、現実的にアクティブラーニングが難しい
- (4) 大学の教員向けのシラバスでも、「アクティブラーニングを取り入れること」というものが記載されている。そういう点では、大学の教育改革も進みつつあるが、ただ、現場が変わっているかどうか、教授が変わっているかどうかは疑わしい。